



TITLE:

新羅中代の國家と佛教

AUTHOR(S):

李, 成市

CITATION:

李, 成市. 新羅中代の國家と佛教. 東洋史研究 1983, 42(3): 442-468

ISSUE DATE:

1983-12-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/153915>

RIGHT:

新羅中代の國家と佛教

李 成 市

はじめに

一 佛教統制機關

二 中代の佛教關係官司

三 皇龍寺と中古の佛教

おわりに

は じ め に

新羅は六世紀初頭に佛教を公的に受容して以來、九三五年の王朝滅亡に至る四百年の長きにわたって独自の佛教文化を開花させた。新羅文化の榮華も佛教なくしては語ることはできない。このような新羅の佛教の特徴として、しばしば指摘されるのは、その國家的性格についてである。高僧たちの護國思想の顯著なことをはじめ、新羅佛教の國家的色彩の濃厚であったことは多方面から言及されている。⁽¹⁾

しかしそこで疑問に思われることは、はたして新羅に佛教が公認されて以來、その性格は受容當初より王朝末期まで全く變ることがなかったのであろうかということである。新羅に受容された佛教はその後、新羅史の「中古」(五一四—六五四)「中代」(六五四—七八〇)「下代」(七八〇—九三五)という時期區分法で呼ばれる時代を経る中で隆盛を極めるのである

が、それはまさに新羅の國家的發展の過程でもある。⁽²⁾ こうした國家の形成發展にともなつて新羅佛教の國家的性格も、そのような史的展開に即應して、獨自の變容をとげたであらうということは十分に考えられることである。

從來、新羅佛教の國家的、護國的性格については、様々な視點から論じられても、それらの歴史的な變容の過程についての意識的な究明はあまりなされてこなかったように思われる。本稿では、そのような變容の過程に留意しつつ新羅の最盛期といわれる中代の國家と佛教の關係とその性格について、佛教統制機關や佛教關係官司の考察を通して明らかにしてみたい。

一 佛教統制機關

國家と佛教の關わり方を知る上で重要な手がかりを與えてくれるのは、いわゆる佛教統制機關であらう。新羅の佛教統制機關については、史料が零細であるために、未だに十分に明らかにされていないところもある。しかし、ここでは先學の研究によって得られた成果⁽³⁾を踏まえ、中古に成立した佛教統制機關の官制上の變遷を通觀し、その性格の變化について明らかにしておきたい。

南北朝時代に發達した佛教統制機關は、新羅に佛教が公認されてまもない頃にすでに新羅にも受容されたらしく、史料の上ではかなり早期に成立したことがみえてゐる。そのことを示すのが『三國史記』と『三國遺事』に各々載録された以下の記事である。

政官〔或いは法典と云う〕始め大舍一人・史二人を以て司と爲す。元聖王元年に至りて初めて僧官を置く、僧中の才行有る者を簡びて之に充つ、故有らば、則ち遞う、年限を定むる無し。國統一人〔一に寺主と云う〕、眞興王十二年、高句麗の惠亮法師を以て寺主と爲す。都唯那娘一人、阿尼なり。大都唯那一人、眞興王始めて寶良法師を以て之と爲す、眞德王元年一人を加う。大書省一人、眞興王安藏法師を以て之と爲す、眞德王元年一人を加う。少年書省二人、元聖王三年、惠英・梵如の二法師を以て之と爲す。州統は九

人、郡統は十八人なり。〔三國史記〕卷四〇、職官下

新羅眞興王二年庚午、安藏法師を以て大書省と爲す、一人。又、少書省有り、二人。明年辛未、高麗の惠亮法師を以て國統と爲す、亦た寺主と云う。寶良法師を大都維那と爲す、一人。及び州統九人、郡統十八人等あり。職に至りて更に大國統一人を置く、蓋し非常の職なり、(中略)後、元聖大王元年に至り、又、僧官を置きて政法典と名づく。大舍一人・史二人を以て司と爲す、僧中の才行有る者を揀びて之に充つ、故有らば即ち替り、年限を定むる無し。〔三國遺事〕卷四、慈藏定律條

みられるように二つの史料はほぼ同様の内容を記しているながらも、よく對比してみると必ずしも一致しない。しかも傍證する史料を缺くために個々の解釋をめぐって諸説あり、十分解明されていないところも少なくない。しかし兩史料からほぼ認めてよい事實として、以下の諸點をあげることができる。

まず第一に、新羅の僧官は、政官と呼稱されたらしく、その政官の嚆矢は、眞興王二年(五五二)の高句麗僧惠亮を國統に任じたことにある。そしてこの眞興王代には國統の他に、大都唯那、大書省といった僧官も設置され、さらに尼僧を任じた都唯那娘もこの頃置かれたとみられる。⁽⁵⁾

第二に、このような僧官の組織は、眞德王元年(六四七)に若干の定員の補充があったことが確認される。

第三に、僧官は地方にも置かれ、州統九人、郡統一八人はその定員數から、統一後の九州制成立後には、各州に對して州統一人、郡統二人をそれぞれ派遣したものと考えられる。

第四に、その後、元聖王元年(七八五)に僧官組織である政官に大きな變化が起こったことである。その詳細については不明な點が多いのであるが、ここでは邊善雄氏の說に従い、政官が新たに設置された政法典に吸収廢合されたと考えておきたい。⁽⁶⁾

以上の僧官による統制機關に對し、俗官による佛教統制機關に大道署がある。大道署については、『三國史記』卷三八、

職官上に、

大道署〔或いは寺典と云い、或いは内道監と云う〕禮部に屬す。大正一人、眞平王四十六年に置く、景德王改めて正と爲す、後ち復して大正と稱す、位級復より阿湊に至るを之と爲す〔一〕に云う、大正の下に、大舍二人有りと。主書二人、景德王改めて主事と爲す、位舍知より奈麻に至るを之と爲す。史八人。

とあり、禮部に屬し、大正、(大舍)、主書、史によつて構成されていたことがわかる。大道署の沿革については、まず眞平王四十六年(六二四)の大正一人の設置をもつて始まることが記されているが、この設置當初の官司名は割注にいう寺典であつて、その後大道署と改稱され、さらに景德王代の一時期に内道監と改稱されたということがすでに指摘されている⁽⁷⁾。また寺典から大道署への改稱の時期についても、中央行政官廳の大規模な改編がなされた眞德王五年(六五一)であることが明らかにされている⁽⁸⁾。したがつて、大正一人の設置をもつて始められた俗人の佛教統制機關である寺典は、六五一年に至り官人の大幅な増員がなされ、大道署として改編されたことになるのである。

眞平王代

眞德王代

景德王代

〔寺典〕(大正) — 〔大道署〕(大正・大舍・主書・史) — 〔内道監〕 — 〔大道署〕

以上は僅かな史料から知りうる新羅の佛教統制機關についての概略である。このような僧・俗からなる佛教統制機關に對して、まず注意しなければならないのは、その實態と機能であらう。かつて新羅の僧官は官制上、北齊のそれに近似していることからその機能も「自治的な僧侶の統制機關」と見做されたことがあつた⁽⁹⁾。しかしその後、こうした規定が新羅の實狀を無視した見解であつて、官制上の類似は必ずしも同一の機能をもたらすとは限らないという批判がなされた⁽¹⁰⁾。すなわち、新羅においては、南北朝に佛教統制機關が生み出されたような佛教勢力が國家權力と牴觸し、國家が支配體制を堅持するために僧官を設置するという歴史的狀況は存在せず、國家權力によつて統制すべき僧侶の集團や教團といった佛教勢力は、少なくとも六世紀の段階では認めがたいのである。したがつて上述の如き眞興王代の新羅の僧官は、佛教統制

機關、あるいは自治機關としての機能はなく、國王が僧侶を優遇するために榮譽として授けた一種の稱號として始まったという指摘は⁽¹¹⁾妥當である。それゆえ新羅の僧官設置は、その實態に即していえば、佛教を保護し育成するための措置であったと言ふことができる。

ところで導入當初にあつてはこうした性格を強く帶びていた僧官も、高句麗・百濟との抗争が激化する七世紀中葉には、變貌をとげたあとが見うけられる。まずその點を官制の上からも示すのが六四七年における大都唯那、大書省の各々一人の増員であり、さらに俗官の佛教統制機關である寺典が六五一年に官人の大幅な増員があつて、大道署として擴大改編されていることである。僧官の増員や官制上のこのような變化のもつ意義が決して小さくなかつたことは、六四三年に唐から歸國した慈藏を大國統に任じ、佛教の諸政策を命じた經緯とその内容を記した次の史料が語っている。

朝廷議して曰く、佛教東漸し、百千齡なりと雖も、其の住持修奉に於いて軌儀缺如せり、夫の綱理に非ずんば、以て肅清することなからんと。啓して藏に敕して大國統と爲し、凡そ僧尼一切の規猷は總べて僧統に委ねて之を主らしむ。藏は斯の嘉會に値いて、勇激して弘通し、僧尼五部に令し、各々舊學を増し、半月ごとに戒を説かしめ、冬春に惣試して持犯を知り、員管を置きて之を維持せしむ。又、巡使を遣わして外寺を歴檢し、僧の失を誡礪し、經像を嚴飾せしむるを恆式と爲す。一代の護法、斯に於いて盛んなり。⁽¹²⁾

すなわち、傍線部にみられるように、ここに至つて僧尼に臨む姿勢は、文字どおり國家權力が佛教を支配體制の隷屬下に置くという意味での佛教統制ということが、現實の課題として實在することを示している。既述した僧官の増員や官制上の變化は、まさにこうした課題に即應した施策とみなければならず、ここに佛教統制を含めた新羅の佛教政策全般にわたる大きな轉換をみてとることができるのである。

以上を要するに、佛教統制機關を通じて新羅の國家と佛教のかかわり方を検討するならば、七世紀中頃に重要な畫期が認められるのである。またそれは中古の終焉と中代開始の狹間にあたっていることに注目されるのである。

二 中代の佛教關係官司

新羅の佛教統制機關は、中代の直前である六四〇年代に大きな變化がみられ、新羅の國家と佛教の關係を考える上で重要な畫期として注目されることを指摘したが、その後、中代における統制機關の變化は史料の上では認められないのである。⁽¹³⁾そこで次に、中代の佛教關係官司を考察することによって、別の視點から中代の國家と佛教の關係を検討することにした。

『三國史記』卷三八、職官上には、中央行政官制が記されており、表はそれに據って、七世紀中葉の景德王代における官司名とその官職の構成を示したものである。⁽¹⁴⁾みられるようにその中には佛教統制機關であつた大道署（內道監）の他に、一群の寺院關係官司が認められる。誰もがまず目を引かれるのは、それらの中に上級官司に比肩する五等官制を具備した大規模な官司が存在することであろう。これらの寺院關係官司は、七世紀中葉の時點では六つ認められるが、この他にも、すぐ後に設置されたことが職官志に記されている奉恩寺成典があり、⁽¹⁵⁾さらにこれらの記録から脱漏したいくつかの寺院關係官司のあつたことが指摘されている。

このような寺院關係官司は、景德王代の官司名改稱以前の某寺成典という舊名や、改稱後の修營某寺使院という官司名から、寺院の建立を始めとして營繕、造佛等の土木工事及び寺院の管理を目的とした機關であつたと推定される。こうした設置の目的からも、また金石文等の史料からも、寺院關係官司が俗官による俗務を擔當していたことは明らかである。ところでこれらの寺院關係官司（以後、便宜上、寺院成典と呼ぶ）の中でも、特に注目されるのは四天王寺、奉聖寺、感恩寺、奉德寺の寺院成典である。それらは、その官職の構成において、上級官司に匹敵する規模を有し、五〇年から百年以上の長期にわたつて官司の存在が認められる點で共通しており、しかも中代の建立になることが確定できることなどから、これらの寺院成典は、中代の國家と佛教の關係を知る上で重要な手がかりになると考えられるのである。さらにこの

ってその概要を通観しておこう。

まず四天王寺は『三國史記』によれば、文武王一九年（六七九）に建立されたとあり、建立の由來と経緯については『三國遺事』に詳述されている。⁽¹⁸⁾ 多分に説話的な潤色の強いものではあるが、その記すところを要約すれば次のとおりである。すなわち高句麗滅亡後、新羅と唐との關係は惡化し、兩者の戰爭は不可避な狀況にあった。その折に僧明朗の勧めにより慶州狼山の南に寺院を建立したところ、唐軍の船が覆没したというのである。明朗が造寺とともに道場開設を進言したことにみられるように、四天王寺は、對外的危機に際して鎮護國家の道場として建立されたことを知るのである。

感恩寺については、『三國遺事』は神文王が、亡父である文武王のために建立したことを明記している。⁽¹⁹⁾ しかしその割注に引かれた『寺中記』には、文武王が倭兵を鎮めるために慶州の東海岸に建立を創めたものの、未完のまま崩じたので、子の神文王が完成させたという異説が載せられている。さらに『寺中記』には、龍に化した文武王のために、金堂に特殊な備えを施したことが述べられているのであるが、近年の發掘調査によって、その特異な遺構は『寺中記』の内容と符合することが確認された。⁽²⁰⁾ そうしてみると、文武王が生前に智義法師に對して、

朕が身後、願わくは護國の大龍と爲り、佛法を崇奉し、邦家を守護せんことを。⁽²¹⁾

と語ったことをも考えあわせるならば、少なくとも感恩寺は、神文王の父を追善するための菩提寺というよりは、元來は佛法の加護によって邦家の守護を祈願した文武王の發願による護國寺院であつたということに比重が置かれなければならまい。

次に奉徳寺は、いわゆるエミレの鐘、聖徳大王神鐘が奉納された寺院としても著名である。この寺院については、『三國遺事』は二説を載せており、判然としない。すなわち一説には、聖徳王が神龍三年（七〇七）に曾祖である太宗武烈王の追善のために創めたとあり、一説には、孝成王が亡父・聖徳王の追善のために開元二六年（七三八）に寺を創めたとある。建立の由來に關するこの兩説の検討は後述するが、いずれにせよ、これまで先王を追善する王室の菩提寺という性格が強

調されてきた寺院である。⁽²³⁾

最後の奉聖寺は、『三國遺事』には、神文王が臣下の信忠を追善して建立した「信忠奉聖寺」がみられることから、この寺院は臣下を追善した菩提寺と見做されている。ただその建立時期については八世紀中葉の景德王代としなければならぬという指摘があり、この点については後に検討するように従うべき卓見であると思う。⁽²⁴⁾

以上、四つの寺院の建立の時期とその由來を概観したのであるが、それによって成典の組織をもったこれらの寺院は、護國の寺院であったり、先王や臣下を追善するための寺院であったことがわかる。それゆえ國家や王室の厚い保護と管理を受けていた寺院であるという從來の指摘は一應認めてよさそうにも思われる。⁽²⁵⁾

しかしここで特に問題としたいのは、成典の組織をもったこれらの寺院について、各々を「護國寺院」と「王室寺院」とに判別しながら、結局それらは國家や王室の厚い保護と管理をうけていたといったように、一方で國家と王室を區別しその機能も異なるものとして扱いながらも、一方ではその差異を嚴密に規定することなく國家と王室を並列して論じていることである。⁽²⁶⁾ 私見によれば、新羅中代においては、國家と王室は、原則的に官制上の區分とそれを裏づける財政上の區分がなされており、それゆえ寺院成典を論ずる際に、國家と王室を無限定に混用すべきでないと考ええる。やや詳しく言えば、新羅中代の官制は、中央行政官制と内廷官制とに明確に區分され、それらは『三國史記』職官上・中に分載されている。この區分をもたらしたのは、眞德王五年（六五一）における新羅の一大官制改革によるものであって、これを畫期に新羅では國家財政と王室財政は分離され、中央行政官廳は國家財政によって運営されていたと考えられるのである。⁽²⁷⁾ したがって中央行政官廳の中に位置づけられた寺院成典は、明らかに國家財政によって運営されるべき官司でなければならぬ。またそこで造營された寺院の機能も當然のことながら、國家的な役割が期待されていたと推定されるのである。

すでに四天王寺や感恩寺については、そうしたことが史料の上からも認められることをみてきた。そこで問題となるのは、個人の追善のために建立されたという傳承のある奉德寺と奉聖寺であろう。この二寺院については既述の如く、建立

の由來に二説あったり、時期的な錯誤があったりして、傳承が明確でないという點でも共通している。それゆえ、まずこのようなこと自體に、そうした傳承に誤解や後世の附會があったのではないかという疑念がもたれるのである。はたして、それらの曖昧な建立の由來も、十分な検討を加えることによって、二つの寺院の創建の背景に護國の祈願がこめられていたことが浮びあがってくる。以下において、この點を明らかにしてみよう。

奉徳寺の建立の由來については、前に記したように『三國遺事』には相異する記事がある。すなわち、

第三十三聖徳王、^①神龍二年丙午歲、禾登らず、人民飢うること甚し、^②丁未正月初一日より七月三十日に至るまで、民を救い租を給す、

一ロ一日に三升を式と爲す、事を終えて計るに、三十萬五百頃なりき。^③王、太宗大王の爲に奉徳寺を勅め、仁王道場を設くること七日。^④大赦す。(卷二、聖徳王條)

寺は乃ち孝成王開元二十六年戊寅に、先考聖徳大王の爲に福を奉じて、創めし所なり。(卷三、皇龍寺鐘・芬皇寺藥師・奉徳寺鐘條)とあって、兩史料はまず第一に、その創建年には三一年の開きがあり、第二には、一方は太宗大王の、一方は聖徳大王の追善のために寺を創めたとなっている點が異なる。しかし、すでに李昊榮氏によって明らかにされているように、これらの相違點をもつ兩史料は第一の點では矛盾するものでなく、奉徳寺は聖徳王の丁未年に着工され、孝成王の戊寅年に完成された^⑤と見なければならぬ。李昊榮氏のこうした指摘とともに重要なのは、聖徳王條の史料のもつ意味についてである。この史料は二年にわたる出來事を記しており、それはまた③の部分以外は『三國史記』新羅本紀に對應記事があるものの、決して單なる出來事の羅列ではない。それはまさに丙午年の飢饉に對する一連の施策を記した前後關係の明瞭な一貫した文章なのである。^⑥したがって③の部分もこのような文脈の中で捉える必要があり、奉徳寺創建をただ單に聖徳王代に關連する出來事として前後の脈絡から除外させて^⑦考えることはできない。つまり奉徳寺の創建は、丙午年の飢饉との關連で捉えなおさなければならぬのであり、直接的には飢饉に對處する方策の一つであったと考えられる。そのことを補

足するように、奉徳寺創建に續いて仁王道場の開設に關する記事がある。これについては濱田耕策氏も指摘するように、³²着工もない奉徳寺で開催されたというよりは、護國の中心道場であつた皇龍寺における仁王會であつたと推察される。しかし留意しなければならないのは、仁王道場が他の寺院で開設されたとしても、奉徳寺が大飢饉のさなかで創められ、續いて仁王道場が開かれてゐることである。

周知のように仁王道場で講説される『仁王護國般若波羅蜜經』は護國の經典であり、國家安穩、除災致福を祈願する際にしばしば用いられる經典である。こうした點を踏まえるならば、仁王道場に先だつ奉徳寺建立の目的が第一義的にどこにあつたのかは自ら明らかになつてこよう。すなわち奉徳寺は、前年の大飢饉に對處すべく七〇七年に、國家安泰、攘災招福を祈願して着工された護國寺院であり、それゆゑ、この時に寺院成典が組織されたのである。³³

奉聖寺についても同様のことが考えられる。『三國遺事』卷五、神呪 惠通降龍條には奉聖寺に關して次のように記されている。

初め神文王疽を背に發し、候を通に請う。通至りて之を呪するに立どころに活く。乃ち曰く、陛下、曩昔 宰官の身爲りしとき、誤ちて藏人信忠を決して諫と爲す。信忠怨み有り、生生に報いを作す。今茲の惡疽も亦た、信忠の崇る所なり、宜しく忠の爲に伽藍を創し、冥祐を奉じて、以て之を解くべしと。王深く之を然りとし、寺を創して信忠奉聖寺と號す。寺成るや、空中に唱へて云く、王に因り寺を創す、苦より脱し天に生ぜよ、と、怨み已に解けたり。

これによれば、奉聖寺は、臣下であつた信忠の怨みを解くために神文王が追善供養として建立した寺院となつてゐる。ところが信忠は神文王代の人物ではなく、八世紀中葉の景德王代に活躍した人物なのである。³⁴信忠については、『三國史記』新羅本紀には勿論のこと、『三國遺事』卷五、避隱・信忠掛冠條にも、

孝成王潛邸の時、賢士信忠と奉を宮庭の栢樹下に圍み、嘗て謂いて曰く、他日、若し卿を忘るれば栢樹の如き有らんと。信忠興きて拜す。數月を隔てて王位に即き功臣を賞するも、忠を忘れて之を第せず、忠怨みて歌を作り栢樹に帖す。樹忽ち黃悴す。(中略)乃

ち之を召して爵祿を賜いたるに、栢樹乃ち蘇れり。(中略)是れ由り寵、兩朝(孝成・景德)に現わる。

とあることからこの點はまず間違いない。ただし前出した神文王代のこととして登場する信忠と奉聖寺に關する史料を、信用のおけないものとして全て切り捨ててには及ばず、信忠には現世に對する深い怨みがあったこと、奉聖寺は信忠と密接な關連があったことは認めてよさそうである。というのも『三國史記』新羅本紀には、信忠が新羅の最高職位である上大等に就いたことがみえており、その後、王の背信をうけて短期間のうちに退いている事實があるからである。信忠の怨みがこのような現實の政治問題に關わつていたとすれば、奉聖寺建立の由來も、信忠の上大等在職と密接な關連があったことを想定してみることができよう。

そこで注目されるのは、信忠が上大等に就任するまでの経緯である。すなわち、景德王一三年八月、早と蝗害は猛威をふるい、翌年春には全國的な飢饉にみまわれ、加えて疫病の流行したことが『三國史記』にみられる。⁶⁶ こうした事態に對し、當時上大等の職にあった金思仁は、『三國史記』卷九、新羅本紀、景德王一五年春二月條に、

此年、災異屢しば見わるるを以て、上疏して時政の得失を極論す、王之を嘉納す。

とあるように、具體的な上疏の内容は不明であるが、景德王に政策上の責任を迫つたようである。金思仁の上疏は嘉納されたとはあるものの、思仁は翌年正月、病を理由に免職されている。⁶⁷ この直後に上大等に就任したのが信忠であった。信忠は前記した兩史料からも窺えるように元來、王の側近であつたようであり、そのような彼が數年續いた天災と飢饉という困難な政治状況の中で、上大等に拔擢されたことになる。

上大等の更迭をも招いたこうした事態にあって、上大等就任直後の信忠が打ち出した政策の一つに護國寺院の創建があつたと思われる。信忠が厚く佛教を信奉していたことや、既述した奉德寺の建立された経緯を考えあわせるならば、信忠によつて護國寺院創建の建議がなされたとしても決してありえないことではない。國家的な大寺院の建立には數十年の期間を要することがしばしばあるので、工事は信忠の上大等在職中に落成されたとは考えられず、恐らく彼の死後に落成さ

れたとみてよいであろう。感恩寺や奉徳寺の例にみられるように、寺院の發願者や工事を繼續した者が、最終的に工事を完成させた者によって追善され、さらに寺院自體もそうした者に對する菩提寺として傳えられることからすれば、當初、國家安穩、除災致福を祈願して創建された奉聖寺が後世、信忠を追善するための寺院として傳えられたとしても不思議なことではあるまい。

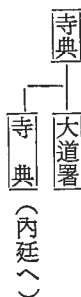
このように考えられるとすれば、奉聖寺はもともと臣下の追善のために建立された菩提寺ではなく、打ち續く天災と飢饉の中で、國家安穩、除災致福を祈願する護國の寺院として創建された國家の寺院であつたということにならう。

以上の考察によつて、奉徳寺や奉聖寺もまた、單に個人の追善という目的にとどまらず、四天王寺や感恩寺と同様に國家的な役割が期待された護國寺院であることがわかる。それゆえ寺院成典が組織され、國家の管理と保護があつたのである。換言すれば、成典が組織された寺院は、國家財政によつて管理、運営される國家の寺院であり、政策の上からも財政の上からも王室とは原則的に分離されていたということにならう。寺院成典は國家の寺院の建立と營繕を目的とする官司なのである。

こうした考え方を裏付けてくれるものとして、中央行政官廳の中に位置づけられた寺院成典に對して、内廷にも王室獨自の寺院關係官司の存在することを指摘したい。

『三國史記』卷三九、職官中には一一五に及ぶ内廷官司が列擧されているが、これらの官司は既述の如く、六五一年以降、國家財政とは分離された獨自の財源によつて運営されていたと考えられる。⁽⁴⁰⁾そしてこの内廷官司群の中に、寺典、阿尼典、願堂典、僧房典などの佛教關係の官司が認められるのである。これらの官司は若干の官職構成を知りうるだけで、その沿革も機能も全く不明であるが、その官司名からある程度の推定は可能である。⁽⁴¹⁾

まず寺典は、⁽⁴²⁾大道署の舊名であることから、六五一年における大道署への擴大改編の際に、内廷に移管されたのではないかと考えられる。したがつてその機能も、俗人による佛教統制機關としての性格を帯びていたと推定される。



阿尼典については、新羅において「阿尼」は尼僧を意味することが明らかにされているので、尼僧を管理、監督する官司ではないかと思われる。⁴³⁾

次いで願堂典は、「願堂」なる言葉の新羅における用例がないために、時代はやや降るが、高麗太祖の十訓要をみると、⁴⁴⁾

其の二に曰く、諸寺院は、皆な道説、山水の順逆を推占し、開創す、道説云く、吾が占定せし所の外に、妄りに創造を加うれば、則ち地徳を損薄し、祚業永からずと。朕念うに後世の國王・公侯・后妃・朝臣各おの願堂と稱し、或は創造を増さば、則ち大いに憂うべきなり、新羅の末、浮屠を競造し、地徳を衰損し、以て亡ぶるに底る、戒めざるべけんや。

とあり、この用例を参照すれば、「願堂」は國王を始めとする王侯貴族たちの私寺、祈願寺を意味するようである。したがって願堂典は、王室と私的な関係にある寺院を管理、統轄する官司とみられる。

最後に僧房典は、文字どおり僧房を管理する官司と推定される。

このように内廷には、王室の佛教を管掌する官司が存在しており、それゆえ、王室関係の寺院は、願堂典を始めとするこれらの官司によって獨自に管理、運営されていたことが推測されるのである。⁴⁵⁾

具體的な史料に乏しく、これらの内廷の佛教関係官司が新羅中代の王室の佛教活動に對し、實際にどのように關與していたのかという點を史料に即して検討できないのは遺憾である。ただ内廷が王室の寺院を獨自に管理、運営していたことを窺わせる史料として次の記事をあげることができる。すなわち、

宣帝一四年(八六〇)年、(中略)教を下して望水・里南等の宅をして、金一百六十分・租二千斛を共出し、助充して功德を裝飾せしむ。寺は宣教省に隸わしむ。⁴⁷⁾

とあることや、また、

獻康大王遽かに鳳筆を飛ばし、徴して龍庭に赴かしめ、仍って師子山興寧禪院を以て中使省に隸わしむ。⁽⁴⁸⁾

とあるように、それらは上記した佛教關係官司ではないが、しかし新羅下代に地方の禪宗寺院が王の命によって内廷所管の官司である宣教省や中使(事)省に所屬させられている例がみられるのである。⁽⁴⁹⁾

このように國家の寺院が寺院成典によって造營され管理されていたのに對し、王室の菩提寺を始めとする王室關係の寺院は、内廷の佛教關係官司によって管理、運営されていたのであろう。

以上、中代の佛教關係司である寺院成典及び内廷の關係官司を考察してきた。これによって、成典が組織された寺院は、從來のような國家と王室の保護と管理を受けていたといった曖昧な表現は許されず、それらの寺院の國家的な役割と機能に改めて注意しなければならないことが明らかになった。寺院成典によって建立された寺院は國家の寺院であり、その造營の目的と役割は、第一義的には護國の祈願にあったのである。中代はまさにこのような成典による護國寺院の造營が本格化した時代であったといえよう。そしてこうした護國寺院の造營を可能にしたのは、六五一年における官制改革であって、そこに成立した新たな段階の官僚制的な組織力によってのみ、そのような事業が可能になったのである。換言すれば、このような官僚制國家の成立によって、國家と佛教の關わり方は新たな局面をむかえたということになろう。

三 皇龍寺と中古の佛教

すでに佛教統制機關の考察を通して、新羅の國家と佛教の關わり方において七世紀中葉、とりわけ六四〇年代に晝期のあることを指摘した。すなわち、この時期に佛教統制機關が、國家權力による支配體制強化の一環として國家權力の隸屬下に置かれ、それ本來の機能と内實がとまじはれたことを明らかにした。さらに前章では、六五一年における官制改革によって、内廷の佛教關係官司の整備とともに、中央行政官廳においても寺院成典という護國寺院の營繕と管理を掌る官司を出現せしめ、ここに至って國家による護國寺院の建立が本格化することを述べた。

このようなことから、新羅の國家と佛教の關係を考える上で、中古から中代にかけての七世紀中葉は極めて重要な畫期であったことが改めて留意されるのである。ところで新羅佛教にこうした大きな變化をもたらしたのは、既述の如く、直接的には六五一年の官制改革とそれによって新たに成立した官僚制的組織力であったと考えられるのであるが、それは新羅佛教は、この時期にどのような質的轉換があったのだろうか。またその意義は何であったのであろうか。次にこうした問題を闡明するために、今いちど前代に立ちかえて中古における國家と佛教の關係を検討してみたい。

さて中古の佛教を國家との關連でみるならば、やはり中代と同様、護國的色彩の強い國家佛教としての性格を一應認めざるを得ない。たとえば法興王一四年（五二七）の佛教の國家的公認以來、すぐさま大規模な造寺、造佛の事業がなされている。なかんづく新羅全時代を通して護國寺院の中心的存在であった皇龍寺は、高句麗僧惠亮を僧統に任じた直後（五五三）に着工され、一七年に及ぶ工事のすえ一旦完成している（「創建伽藍」）。さらにその後にも丈六像の鑄成や金堂の改築がなされており、善德王一五年（六四六）の九層塔建立による「重建伽藍」の最終的な完成に至るまで、着工以來、實に百年に近い歳月を費していることになる。⁵⁰この皇龍寺は、そこにおいてしばしば百座講會が開催されていることや、九層塔が建立された經緯と相俟って、創建當初より新羅護國寺院の總本山と見做されてきた。また中古の護國佛教は、皇龍寺を中心に論じられてきたといっても過言ではない。そこでまず皇龍寺を手がかりに、中古の國家と佛教の關わり方について検討してみることしよう。

ところで皇龍寺は常に護國寺院としての性格の強かったことが指摘されるのであるが、しかし、それを皇龍寺の創建當初から無條件に認めることには多くの疑問がある。

まず第一に、皇龍寺は鎮護國家の法會（百座講會）を開催するために、惠亮の勸めによって建立されたといわれているものの、皇龍寺における百座講會の開催を示す史料は、『三國史記』卷四、新羅本紀、眞平王三五年（六一三）七月條の、⁵¹

隋使王世儀、皇龍寺に至る。百高座を設け、圓光等の法師を遽え經を説かしむ。

とある記録を初出とし、それ以前には認められないのである。⁶²⁾ しかもこの時の百座講會は、隋の使である王世儀を皇龍寺に迎えてなされており、護國の法會がなされなければならない積極的な理由は見いだせない。たしかに王世儀の新羅派遣は、高句麗との抗争のさなかであったことを勘案するならば、これを對高句麗戰爭と關連づけて外敵降伏を祈禱した法會と解釋できないこともない。⁶³⁾ しかしこの法會が隋使の到着と密接に關わっていたことを念頭におくならば、そのような解釋よりは、むしろ王世儀に對する迎接儀禮としての意味が強かったのではないかと推測される。⁶⁴⁾ いずれにせよこの時の百座講會は護國の法會であるとは斷定しがたいのである。

次いで皇龍寺における百座講會が史料にあらわれるのは、『三國史記』卷五、新羅本紀、善德王五年（六三六）三月條に、王疾む、醫禱效無し。皇龍寺に於いて百高座を設け、僧を集めて仁王經を講じ、度僧を許すこと一百人。

とあるもので、ここでもやはり百座講會は護國の法會ではなく、王の病氣平癒を祈願した法會としてあらわれている。

以上のように中古における皇龍寺の百座講會は、史料上この二度の開催の例を知るのみである。勿論これだけをもって斷言することはできないが、しかし少なくともその二例を見る限り、中古において皇龍寺での護國の法會としての百座講會は認められないのである。

次に、皇龍寺が國家的な寺院であったことを示すものとして、皇龍寺の寺主についての指摘がある。すなわち、皇龍寺の寺主は、僧官の最高職位であった國統を兼任している例が多く見られ、ここに皇龍寺とその寺主がもつ國家的役割が窺えるというのである。⁶⁵⁾ ところが、この皇龍寺の寺主については、『三國遺事』卷三、塔像 皇龍寺丈六條に、

寺記に云わく、眞平王六年甲辰、金堂造成す。善德王の代、寺の初主は眞骨・歡喜師、第二主は慈藏國統、次は國統惠訓、次は庠律師なりと云う。

とあって、皇龍寺の寺主は善德王代の歡喜師に始まると記されているのである。史料には善德王代のいつ頃であるのか明記されていないためにそれ以上は知りえないが、皇龍寺の寺主がそれ以前に置かれていないことだけは確かである。國統

をも兼任しうる皇龍寺の寺主が善德王代に初めて置かれたのであれば、皇龍寺の國家的寺院としての機能も、當然のことながら、寺主の設置時期と関連させて考えてみなければなるまい。

そもそも史料の上で皇龍寺が明らかに護國という國家的役割を強くもつに至ったことを示すのは、善德王一四年に完成された九層塔の建立の経緯を記した『三國遺事』卷三、皇龍寺九層塔條の次のようなくだりなのである。

慈藏法師西に學び、乃ち五臺に於いて文珠に感じて法を授けらる。(中略)藏問う、郷に歸るには何をか利益と爲さんやと。神曰く、皇龍寺の護法龍は是れ吾が長子なり、梵王の命を受け、來つて是の寺を護るなり、本國に歸り、九層塔を寺中につくらば、鄰國降服して、九韓來貢して、王祚永く安かならん。塔を建つる後、八關會を設け、罪人を赦さば、則ち外賊害を爲す能わず。(中略)予も亦た、之が德に報いんと。

さらに九層塔建立の経緯については、近年、景文王一一年(八七二)の改修工事の際に記された「皇龍寺九層木塔利柱本師^師」が発見され、それには歸國する慈藏に對し、南山圓光禪師が與えた言葉として、

禪師謂いて曰く、吾れ觀心を以て公の國を觀るに、皇龍寺九層翠塔波を建つれば、海東諸國は渾べて汝の國に降らんと。慈藏語を持して、還り以聞す。乃ち監君・伊干龍樹に命じて(中略)斯の塔を造らしむ。

と記されている。これによって『三國遺事』の記事は説話的な潤色はあっても、その建立の契機に關する歴史的な事實をかなり忠實に傳えていることを知るのである。そして兩史料からも九層塔が鄰國の災を鎮めるために建立された護國の象徴であったことは明らかであろう。そうしてみると、歸國後の慈藏によって佛教政策上の大改革がなされたことや、皇龍寺の寺主の設置が善德王代であったことなどを考えあわせるならば、皇龍寺の護國寺院としての役割もまた、この善德王の時代の所産であつたとみることができよう。

この點をいささかでも裏附けるのは、それ以前の皇龍寺は、護國寺院としての國家的性格よりは、むしろ王室との關連が強かったとみられることである。皇龍寺創建の由來については、『三國史記』卷四、新羅本紀には、

眞興王一四年春二月、王所司に命じて新宮を月城の東に築かしむ。黃龍其の地に見わる。王之を疑い、改めて佛寺と爲し、號を賜いて皇龍と曰う。

とあって、皇龍寺の建立された數地には、本來「新宮」(『三國遺事』は「紫宮」)⁽⁵⁸⁾すなわち王室の宮殿が造營されることになつてゐたことがわかる。近年、皇龍寺趾の發掘調査が進展するにともなつて、その特殊な伽藍配置が注目されているが、とりわけ下層伽藍址に創建伽藍が古代伽藍の一般的な平面構成とは甚だしく異なるという指摘がある。⁽⁵⁹⁾そしてこのような現象は、宮殿のための工事が相當程度進展した段階で寺院に改變させたために、すでにできあがつてゐた宮殿の地割りや地業をそのまま利用して寺院としたことを示すものであつて、本格的な伽藍形式は重建伽藍で初めて採用されたのであらうと解釋されている。⁽⁶⁰⁾つまり、創建伽藍と重建伽藍との間に大きな變化がみられ、創建伽藍の特異な構造は、當初、宮殿としてのプランにもとづいて工事が進められていたことにその所以があるのではないかといわれているのである。皇龍寺創建に際してこのような経緯が實際にあつたとすれば、皇龍寺は初めから護國寺院として建立されていたというよりは、むしろ王室の私的な性格の強い寺院として創められた可能性が高くなつてこよう。

中古の皇龍寺が王室の私的な性格を帯びていた可能性のあることと關連して注目されるのは、中古の佛教には王室との極めて密接な關係が見いだせることである。それを端的に示すのが王族の名前である。中古は「佛教王名時代」ともいわれるように、全ての王と一族に對して、佛教にちなんだ名がつけられている。たとえば、眞興王以降の王や王族に冠せられた「眞」字(眞種説)や、眞興王の二子につけられた金輪、銅輪の名(轉輪聖王説)、また眞平王を中心に王族の諱に釋迦の家族と同一の名をつけるなど、そこには王即佛の思想が直截的に表現されている。⁽⁶²⁾これによつても中古の王室が佛教とどのように關つたかは明らかであらう。ここに王室と佛教が完全に密着して一體となつた王室を中心とする宮廷佛教の一端が窺知されるのである。

以上、皇龍寺を手がかりにして中古における佛教の性格を検討してきた。それによれば、皇龍寺は創建當初より護國寺

院であつたわけではなく、王室の私的な寺院として創められた可能性が極めて高い。このような皇龍寺が護國的な性格をもつに至つたのは善徳王代であり、この時における皇龍寺九層塔の建立、寺主の設置は、慈藏の歸國によつて推進された佛教政策と軌を一にしたものであつたと考えられる。さらに皇龍寺の創建伽藍から重建伽藍への變化は、こうした過程を象徴する現象とみなしてもよからう。

従來、中古の佛教についても護國的な性格が強調され、中代への變化は、そうした性格が一層強まるという程度にとらえられてきた。ところが中古の佛教は、この時代の皇龍寺に象徴されるように、中代の寺院成典によつて建立された寺院がもつ護國的な性格とは基本的に異なる王室の私的な性格を色濃くもつていたのである。このようなことを前提にして考えるならば、あの七世紀中葉における新羅佛教の晝期は、中古の王室佛教から中代の國家佛教への轉換として把握されるのである。

おわりに

以上述べてきたことをまとめれば次のようになるであらう。

一般に新羅佛教は國家的性格の強い佛教であるといわれてきた。しかし歴史的な變容の過程に留意して新羅の國家と佛教の關係及びその性格を検討してみると、七世紀中葉に看過できない大きな晝期のあることがわかる。

まずその點を示すのが新羅の佛教統制機關にみられる性格の變化である。六世紀中葉の設置當初にあつては佛教の保護と育成をめざした僧官は、六四〇年代に統制機關としての内實と機能を備えるに至り、俗官の統制機關も六五一年に大道署として組織の充實がはかられた。ここに新羅においてはじめて佛教統制が現實の課題となり、この課題に對處すべく、佛教が國家の行政機構の中に組みこまれていった様相を窺うことができるのである。

いまひとつそのことを示すのは、六五一年の官制改革を契機に寺院成典が中央行政官廳内に成立したことである。寺院

成典は、護國寺院を造營、管理するための官司であつて、その寺院は、對外的な危機あるいは天災や飢饉に際し、國家安穩、除災致福を祈願して造營された。寺院成典とそれによる造營事業は、官司の組織のみならずその政策も、王室とは原則的に分離された公的な性格を強く帯びていたのである。

このような中古から中代への過渡期において、新羅佛教は巨視的にはどのような質的轉換をとげたのであろうか。この點を中古の佛教、特に皇龍寺を手がかりに検討してみると、それは王室佛教から國家佛教への轉換とみることができる。皇龍寺は從來、創建當初より護國寺院とみなされてきた。また實際に佛教興隆の中心寺院であつた。しかし創建當初にはむしろ王室の私的な性格が強く認められ、そのことは中古の王室と佛教の關わり方にもみてとれるのである。皇龍寺が名實ともに護國寺院としての面貌を備えるのは六四六年の九層塔建立をまたなければならず、それは六四〇年代の慈藏によつて進められた一連の佛教政策と軌を一にするものであつた。

中古から中代への過渡期における如上の變容を経て出現したのが中代の護國佛教なのである。それはまさに國家佛教と呼ぶにふさわしい新たな段階の佛教であつたといえよう。

註

- (1) 江田俊雄『朝鮮佛教史の研究』(國書刊行會、一九七七年)、李基白『新羅時代の國家佛教と儒教』(韓國研究院、ソウル、一九七八年)。
- (2) 末松保和『新羅三代考—新羅王朝史の時代區分』(『新羅史の諸問題』東洋文庫、一九五四年)。
- (3) 李弘植『新羅僧官制と佛教政策の諸問題』(『白性郁博士頌壽紀念佛教學論文集』(ソウル、一九五九年)原載、『韓國古代史の研究』(新丘文化社、ソウル、一九七三年)所收)、井上光貞『日本における佛教統制機關の確立過程』(『日本古代國家の研究』岩波書店、一九六五年)、中井眞孝『新羅における佛教統制機關について—特にその初期に關して』(『朝鮮學報』五九(一九七一年四月)原載、『古代の朝鮮』(學生社、一九七四年)所收)、邊善雄『皇龍寺九層塔誌の研究—成典と政法典問題を中心として』(『國會圖書館報』二〇—二〇(ソウル、一九七三年二月))。
- (4) 中井眞孝『新羅における佛教統制機關について』(『前掲書』

九三頁)によれば、僧官が新羅独自の官司名である「政官」をもって呼稱されたのは、実際には六五一年以降とされている。

- (5) 都唯那娘については、李基白「三國時代佛教受容と社會的意義」(『新羅時代』國家佛教外儒教)〔前掲〕三二頁、李弘植「新羅僧官制と佛教政策の諸問題」(『前掲書〕四七七～四七九頁)参照。

- (6) 邊善雄「皇龍寺九層塔誌の研究」(『前掲誌〕五五～五六頁)。

- (7) 井上光貞「日本における佛教統制機關の確立過程」(『前掲書〕三二九～三三〇頁)。ただし、寺典から大道署への改編時期を眞平王代とする點は論據が不十分であり、次に掲げる中井氏の見解に従うべきである。

- (8) 中井眞孝「新羅における佛教統制機關について」(『前掲書〕八六頁)。

- (9) 井上光貞「日本における佛教統制機關の確立過程」(『前掲書〕三三一頁)。

- (10) 中井眞孝「新羅における佛教統制機關について」(『前掲書〕八九～九三頁)。

- (11) 同上。

- (12) 『三國遺事』卷四、慈藏定律條。

- (13) 一般に州統や郡統の地方派遣はその定員數から、九州制成立(六八五)以後と推定されている。しかし慈藏の諸政策の中には外寺の檢察があり、州統・郡統の設置もこの時期にすでに始められていたと考えられる。また既述の如く新羅の佛教統制機關は、元聖王元年(七八五)にも大きな變化がある。しかし下代におけるこの變化が具體的にどのようなものであったのかその

の詳細は不明であり、今後の大きな課題の一つとして残されている。

- (14) 表は、木村誠「統一新羅の官僚制」(『東アジア世界における日本古代史講座〕六「日本律令國家と東アジア」(學生社、一九八二年)一四〇～一四一頁)にもとづき、一部手を加えてある。

- (15) 奉恩寺成典については、

奉恩寺成典、衿荷臣一人、惠恭王始置、哀莊王改爲令、副使一人、惠恭王始置、尋改爲上堂、哀莊王又改爲卿、大舍二人、史二人。

と記されており、惠恭王代(七六五～七七九)の設置になるとわかる。

- (16) その他の寺院成典については、『聖德大王神鐘之銘(七七二)』(黃壽永『韓國金石遺文(第三版)』(二)志社、ソウル、一九八一年)二八八頁)に「檢校眞智大王寺使」なる官職名がみられ、『皇龍寺九層木塔利柱本記(八七二)』(黃壽永『前掲書〕一五八頁)には「成典」として「監修成塔寺守」以下「上堂」「赤位」「青位」「黃位」なる官職名がみられることから、眞智大王寺成典と皇龍寺成典が存在していたと考えられている(邊善雄「皇龍寺九層塔誌の研究」〔前掲〕、濱田耕策「新羅の寺院成典と皇龍寺の歴史」〔學習院大學文學部研究年報〕二八、一九八二年三月)。しかし、眞智大王寺成典の存在した可能性は十分認められるとしても、皇龍寺成典については保留せざるをえない。何となれば、その長官の官職名「監修成塔寺守」は、皇龍寺九層塔の修成の事を掌る(監守)という意味を帯びている

のであって、これは景文王八年（八六八）に落雷にあい同王一年に塔の大改造工事がなされた際に設けられた臨時の官職である可能性が高い。中代の寺院成典については後述するように、このような個別的な工事のための臨時の組織とは考えがたく、従って『剎柱本記』から皇龍寺成典の存在を存在を想定することは困難である。

(17) 各寺院の創建時期については後述するように最も早いのは四天王寺の六七九年であり、最も遅いのは奉聖寺の八世紀中葉である。これらの寺院成典は哀莊王代にそろって官職名が改稱されているので、少なくともこの時期までは確實に存在していたことになる。因みに三池賢一「新羅内廷官制考（上）」（『朝鮮學報』六一（一九七一年一〇月）八～九頁）によれば、哀莊王代の改稱時期は、同王六、七年（八〇五、六）と推定されている。

(18) 『三國遺事』卷二、文虎王法敏條。

(19) 『三國遺事』卷二、萬波息笛條には、「第三十一神文大王（中略）爲聖考文武王創感恩寺於東海邊」とある。

(20) 寺中記云、文武王欲鎮倭兵、故始創此寺、未畢而崩爲海龍、其子神文立、開耀二年畢、排金堂砌下東向開一穴、乃龍之入寺施繞之備、蓋遺詔之藏骨處、名大王岩、寺名感恩寺、後見龍現形處、名利見臺。

(21) 金載元・尹武炳『感恩寺址發掘調査報告書』（國立博物館特別調査報告、第二冊、ソウル、乙酉文化社、一九六一年）五頁。

(22) 『三國遺事』卷二、文虎王法敏條。

(23) 李吳榮「新羅中代王室斗奉德寺」（『史學志』八（ソウル、一九七四年一月）一六頁）は、奉德寺と中代王室との關連を強調し、奉德寺は中代王室の願刹（菩提寺）であり、「それは王權の權威とその專制を先祖と血統で代辯しようとしたものである」と述べている。濱田耕策「新羅の聖德大王神鐘と中代の王室」（『陶珠集』三（一九八一年二月）三三～三四）もまた概ね李氏の見解に従っている。

(24) 李基白「景德王斗斷俗寺・怨歌」（『韓國思想』五（ソウル、一九六二年一月））原載、武田幸男監譯『新羅政治社會史研究』（學生社、一九八二年）二六八頁。

(25) 濱田耕策「新羅の寺院成典と皇龍寺の歴史」（『前掲誌』二一四頁）。

(26) 濱田耕策「新羅の寺院成典と皇龍寺の歴史」（『前掲誌』二一四～二一四頁）。邊善雄「皇龍寺九層塔誌の研究」（『前掲誌』六〇頁）には、成典は「國王の直接的な支配を受ける國家的で行政的な官司」であると表現されている。

(27) 李成市「新羅の内廷について」（未發表）。その概要については、第三三回朝鮮學會大會（一九八二年一〇月三日、天理大學）において報告した。

(28) 李吳榮「新羅中代王室斗奉德寺」（『前掲誌』三～九頁）。

(29) ①に對しては、聖德王五年秋八月條の「民多饑死、給粟人一日三升、至七月」、④には、二月條の「大赦、賜百姓五穀種子有差」が各々對應する。

(30) 李吳榮「新羅中代王室斗奉德寺」（『前掲誌』四頁）。

(31) 濱田耕策「新羅の神宮と百座講會と宗廟」（『東アジア世界に

おける日本古代史講座』九「東アジアにおける儀禮と國家」
〔學生社、一九八二年〕二五三頁。

32 同上。

33 奉徳寺建立の由來に關する第二の問題點として、相與る先王の菩提寺であるという傳承を如何に理解するかということが残されている。これについて李吳榮氏は、奉徳寺建立の工事を繼續させた聖徳王が、工事を完成させた孝成王によって追善され、聖徳王の菩提寺とされているのは、感恩寺が、工事を繼續、完成させた神文王によって發願者・文武王の菩提寺とされたことと同様の現象とみている。つまり寺院建立には長い歲月を要するために、時の流れとともに始創當初の意味が失われ、いつしか父王のための菩提寺としての性格をもつに至るというのである。したがって李氏は、奉徳寺を聖徳王の菩提寺とする説を退け、太宗大王の菩提寺とみなしている。李氏のこのような考え方は二説あることの矛盾を解く極めて合理的な解釋であると思われる。因みに、先王の追善のために寺院創建を發願した王が途中で崩じ、後年その王が完成された寺院で「先王」とともに菩提を祈願されている例が實際にみられる。〔皇福寺石塔金銅舍利函銘〕〔韓國金石遺文〕前掲書〕一四〇頁。ただこれによれば發願當初の意味は明確に繼承されており、したがって奉徳寺の場合も一方の説を全く否定することはなく、實際には當初の意味を保持しつつ新たな意味が附加されたのである。

ところで李氏はあくまで「爲太宗大王卹奉徳寺」と記されている點を重視するために、奉徳寺のもつ護國寺院としての性格

を認めつつも、奉徳寺建立を祖上崇拜思想とむすびつけ、建立の意義を王室の血統の正統性と專制王權強化の問題に見いだそうとしている。翻つてみるに先王の顯揚や追善と國家安泰の祈願とは不可分の關係にあり、それは『聖徳大王神鐘之銘』〔前掲〕の中の「所以王者元功克銘其上、羣生離苦亦在其中也」とか「乃至瓊蕤之養、共金柯以永茂、邦家之業、將鐵圖而彌昌」といった言辭にもみられるとおりである。それゆゑ奉徳寺建立のねらいもまた單なる菩提寺として王室内の問題に限られるべきでなく、建立に至る經緯を重視するならば、まずもってその國家的な意義に留意しなければなるまい。

34 李基白「景德王斗斷俗寺・怨歌」〔前掲書〕二六八頁。

35 李基白「景德王斗斷俗寺・怨歌」〔前掲書〕二六七～二六八頁。信忠の上大等在職期間は景德王一五年正月から二二年八月までの六年七箇月である。これは一國王に對し一人の上大等がその進退を共にするという原則が破られた中代にあつても短期間の中に屬す。李基白「上大等考」〔歷史學報〕一九〔ソウル、一九六二年二月〕原載、武田幸男監譯「新羅政治社會史研究」〔前掲〕一二二～一三〇頁。

36 『三國史記』卷九、新羅本紀には「十三年八月旱、蝗」〔十四年春、穀貴民饑〕とあり、卷四八、向徳傳には「天寶十四年乙未、年荒民饑、加之疫癘」とあつて、この時の熊川州における飢饉の様子を傳えている。

37 李基白「上大等考」〔前掲書〕一二七～一二八頁。は、この時の金思仁の免職を、景德王との漢化政策をめぐる對立と思仁の敗北によるものと解している。しかし、上疏が災異に關わ

ていたことは明白であり、思仁の上大等免職も直接的にはこの時の災異をめぐる上疏が招いたものと考えられる。

- 33 『三國遺事』卷五、避隱信忠掛冠條には、「景德王二十二年癸卯、忠與二友相約、掛冠入南岳、再徵不就、落髮爲沙門、爲王創斷俗寺居焉、願終身立誓、以奉福大王」とある。

39 註33参照。

40 李成市「新羅の内廷について」(未發表)。

41 官職の構成が記されているものは以下のとおりである。「阿尼典、母六人」「願堂典、大舍一人、從舍知二人」「僧房典、大舍二人、從舍知二人」。

42 六五一年にそれまでの官司が擴大改編された結果、中央行政官廳と内廷官廳とに分割された官司の例として領客府・倭典がある。この点については拙稿「新羅の内廷について」に詳述した。



43 李弘植「新羅僧官制と佛教政策の諸問題」(『前掲書』四七八頁)。

44 『敏哀大王石塔記』(八六三)『黃壽永』韓國金石遺文(『前掲』一五一頁)には「願堂」の用例がみられるが、これは黃氏が缺失箇所を『桐華寺蹟碑銘并序』(一九三)に據って推定した文字である。黃壽永「新羅敏哀大王石塔記—桐華寺毘盧庵三層石塔の調査」(『史學志』三「ソウル、一九六九年七月」)六四

頁)参照。

45 『高麗史』卷二、太祖世家二六年四月條。

46 中代において王室關係の寺院は多數建立されたと思われるが、『皇福寺石塔金銅舍利函銘』(『前掲』)には、王室關係寺院の典型的な姿をみることができ。

47 『寶林寺普照禪師影聖塔碑』(『朝鮮金石總覽 上』)『國書刊行會、一九七一年』六三頁)。

48 『興寧寺澄曉大師寶印塔碑』(『朝鮮金石總覽 上』)『前掲書』一五九頁)。

49 宣教省と中事省については、李基東「羅末麗初近侍機構と文翰機構の擴張—中世的側近政治の志向」(『歷史學報』七七「ソウル、一九七八年三月」)原載、『新羅骨品制社會と花郎徒』(『韓國研究院、ソウル、一九八〇年』二三三—二四六頁)参照。

50 文獻資料からみた皇龍寺の建立過程については、李基白「皇龍寺の創建」(『新羅時代の國家佛教と儒教』(『前掲』)六七—七九頁)、創建伽藍、重建伽藍を中心とした考古學からみた建立過程については、金正基「皇龍寺」(『韓國古代文化展—新羅千年の美』(東京國立博物館・中日新聞社、一九八三年)一四五—一四七頁)参照。

51 李基白「皇龍寺の創建」(『新羅時代の國家佛教と儒教』(『前掲』)七一頁)。

52 『三國史記』卷四四、居柒夫傳には、五五一年に惠亮法師が高句麗から來り、百座講會と八關の法が初めて置かれたと記されている。しかし勿論この時には皇龍寺は存在していない。五七一年の八關筵會が「外寺」で開催されているなど、それらの

實態は不明であつて、後述する中古の百座講會の性格から推し量ると、それらを護國の法會とみなすことは困難である。

- (53) 李基白「皇龍寺外工創建」(『新羅時代の國家佛教と儒教』〔前掲〕五八頁)、中井眞孝「新羅における佛教統制機關について」(〔前掲書〕九二頁)。

- (54) 『三國遺事』卷四、義解 圓光西學條にも、「建福三十年癸酉(卽眞平王卽位三十五年也)秋、隋使王世儀至、於皇龍寺設百座道場、請諸高德說經、光最居上首」とあつて、百座講會を王世儀の到着と關連させて記している。

- (55) 新羅の百座講會は下代に至ると、卽位儀禮の一環に組み入れられたという指摘もあり、百座講會の性格がこのように一樣でないことに留意しなければなるまい。濱田耕策「新羅の神宮と百座講會と宗廟」(〔前掲書〕二三六～二三八頁) 参照。

- (56) 李基白「皇龍寺外工創建」(『新羅時代の國家佛教と儒教』〔前掲〕六一～六七頁)。

- (57) 黃壽永『韓國金石遺文』(〔前掲〕一五八頁)。

- (58) 『三國遺事』卷三、塔像 皇龍寺丈六條。

- (59) 金正基「皇龍寺」(『韓國古代文化展』〔前掲〕一四七頁)。

- (60) 同上。

- (61) 金哲凌「新羅上代社會の Dual organization (下)」(『歷史學報』二〔ソウル、一九五二年一月〕九一頁)。

- (62) 李基白「新羅初期佛教外貴族勢力」(『震檀學報』四〇〔ソウル、一九七五年一〇月〕原載、『新羅時代の國家佛教と儒教』〔前掲〕八六～九四頁)。

THE STATE AND BUDDHISM OF THE MIDDLE SILLA 新羅 PERIOD

Yi Seong Si

Hitherto it has been commonly stated that the Buddhism of Silla was strongly national in character. However, upon consideration of the historical process of change at work and upon examination of the relation and character of Buddhism and the state in the Silla dynasty, one finds that a great transformation took place in the middle of the 7th century.

This is primarily obvious in the change undergone in the administrative organization of Buddhism. In the middle of the 6th century, monk-officials 僧官 had been first established in order to protect and promote Buddhism. In 640's, these gained the substance and functions as a controlling system, and as for the controlling system for civil officials, in 651, filling up the system as *daedoseo* 大道署 was performed. With this development, one can certainly say, Buddhism began to occupy a position in the very center of the political structure of the state.

Another important change of the era lay in the establishment of the office regarding temples 寺院成典 in the administrative offices of the central government. This was connected with the administrative reform of the year 651. This office was established for the erection and management of state-protecting temples 護國寺院. These temples were erected for safety of the nation and salvation from the catastrophe in the case of external threat, natural disasters, or famines. Thus, the building of state-protecting temples gained momentum.

Seen in a macroscopic perspective, the Buddhism of the Silla period accomplished an elemental transformation in the middle of the 7th century, i. e., from royal to state religion. This transformed Buddhism of the middle Silla period faced a new level of development. And now it can be appropriately called State Buddhism.